

第100回 三方限古典塾（'15, 2, 19）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3－17）

1 一念にして鬼神の禁を犯し、一言にして天地の和を傷り、一事にして子孫の禍を醸す者有り。最も宜しく切に戒むべし。 前集 152

（意識） ふとした出来心が神の怒りを招くことになり、うかつな失言が世の中の平和をぶちこわし、ちょっとした過失が孫子の代まで災いを及ぼすことがある。だから、たとえ小さなことであっても細心の注意をはらって行動すべきである。

（余説） 何事にも慎重な配慮が必要だとの戒めですが、現在、新たな問題が生じています。それはインターネットに関することです。一度ネット上に書きこまれた個人情報には削除がなかなか難しいからです。不適切な情報であっても自分ではコントロールできません。便利なものであれば、それに伴う危険性も大きくなります。一度のいたずらで人生が破滅しかねず、一步間違えば誰にでも起こりえます。日常の些細な出来事がきっかけとなって、とんでもない事態を招く時代です。今では「忘れられる権利」という言葉も言われています。「一言が波をたてたり なごんだり」（2/6 南日柳壇）

一方、慎重なだけでは、仕事や事業をやり遂げることはできません。困難にもめげない不屈の精神力による大胆さと、綿密な調査、慎重な配慮の裏づけとの二つが必要なことは当然だと思われまます。いわゆる「胆大心小」です。

（参考） 近思録「胆は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す。」

2 事、之を急にするも白らかならざる者有り。之を寛くせば、或いは自ずから明らかならん。躁ぎ急ぎて以て其の忿を速くこと母かれ。人、之を操るも従わざる者有り。之を縦たば或いは自ずから化せん。操ること切にして以て其の頑を益すこと母かれ。 前集 153

（意識） 物事は、あまりせっかちに事情を知ろうとしても、かえって分からなくなることがある。そんな時には、のんびりと構えて自然に明らかになるのを待った方がよい。無理矢理に急いで相手の反感を買ってはならない。また、人を使おうとしてもなかなか使いこなせないことがある。そんな時には、しばらく放っておくと、或いは自分から変わってくることもある。うるさく干渉しすぎてますます意固地にさせてはならない。

（余説） 日々薬或いは日薬という言葉があります。月日の経過が薬代わりとなります。健康でも教育でも人付き合いでも同じではないでしょうか。そこには、変化するのを待つという辛抱強さと、変化を見定める眼が必要になります。禅宗で言われる「啐啄同時」とは、師家と弟子のはたらきが合致することです。啐とは、鶏の卵がかえる時、ひなが殻の中でつつく音、啄は母鶏が殻をつつき破ることです。聖書にも「天の下の出来事には全て定められた時がある」という言葉があるそうです。要するに「急いては事を仕損じる」ということでしょうか。

また、イソップ童話「太陽と北風」にも、冷たく厳しい態度で人を動かそうとしても、人はかえって頑なになる。暖かく優しい言葉を掛けたり、態度を示すことによって初めて人は自分から行動してくれるという視点もうかがえます。

3 人を信ずる者は、人未だ必ずしも^{いま}尽^{ことごと}くは誠^{まこと}ならざるも、己は則^{おのれ}ち一人誠^{すなわ}なり。
人を疑う者は、人未だ必ずしも皆は詐^{おのれ}らざるも、己は則^{おのれ}ち先^{すなわ}ず詐^{いつく}れり。

前集160

(意識) 他人を信用する人は、他人は必ずしもすべて誠実であるとは限らないが、少なくとも、自分一人だけは誠実であることになる。

これに対し、他人を疑ってかかる人は、他人は必ずしもすべてが偽りに満ちているとは限らないが、少なくとも自分はすでに欺^{あざむ}いていることになる。

(余説) 古来「人を見たら泥棒と思え」の例えもありますが、現在は残念ながら電話等による卑劣な詐欺事件のみでなく、残忍なテロ事件が頻発しており、軽々に人を信じるのが特に難しい時代です。川柳に「年寄りに渡る世間は鬼ばかり」もありましたが、いわゆる「渡る世間に鬼はなし」と併せて永遠の真理であろうと思います。

だからこそ、極端に走らずに「中庸」を心がけつつ、他人からの「信」より、他人への「信」を大切にしたいものです。また、人を100%信頼するのではなくて98%にせよ。誰にも間違いはあるので、残りの2%は相手が間違った時の余地^{いづく}として残しておくという説もあります。孟子は人が生まれつきに持っている「哀れ慈しむ・悪を恥じる・謙^{へりくだ}り譲る・善悪の判断」の心が信につながると唱えています。

(参考) 孟子(公孫丑上)「惻隱^{そくいん}の心は仁の端^{たん}なり。羞惡の心は義の端なり。辞讓の心は礼の端なり。是非の心は智も端なり。」(四端の説) 端とは端緒^{たんしよ}・糸口

4 心、虚^{むな}しければ、則^{とど}ち性現^{とど}わる。心を息めずして性を見んことを求むるは、波^{なみ}を撥^{ひら}きて月を覓^{もと}むるが如し。意浄^{いじやう}ければ、則^{とど}ち心清^いし。意を了^{りやう}ぜずして心を明らかにせんことを求むるは、鏡を索^{もと}めて塵を増すが如し。

前集 169

(意識) 心が是非善悪などを差別する迷いや煩惱を追い払って空虚になると、自ずからその本性が現れてくる。心に雑念を詰め込んだままで、自分の本性を見ようとするのは、まるで波をかき分けて水に映った月をつかもうとするようなものだ。

心のはたらき(意識)をすっきりと清浄になると、心の本体も清らかになる。心のはたらきを清浄にさせないままで、心の本体だけを明らかにしようとするのは、まるで鏡の曇りを除こうとして鏡をますます曇らせるようなものだ。

(余説) 人には、百八つとも八万四千とも言われる「貪^{とん}・瞋^{しん}・痴^ち・慢^{まん}・疑^ぎ・見^{けん}」等の煩惱があるそうです。前回の151条「水は波あらざれば、則^{すなわ}ち自ずから定まり、鑑^{かがみ}は翳^{くもり}あらざれば、則^{すなわ}ち自ずから明らかなり。故に心は清くすべき無し。其の之を混らす者を去かば、清自ずから現わる。」に通じますが、なかなかの難解で実践は難題です。

渡辺和子さんは“置かれた場所で咲きなさい”(幻冬舎)で「現実が変わらないなら、悩みに対する心の持ちようを変えてみる」と書いています。ともすれば、人は自分の心を忘れて何かと議論しますが、時には自分の心の方を変えてみたいものです。

物事の道理は時代と共に移り変わります。時には心に融通^{きわ}を効かせる事も必要です。

(参考) 老子(上篇16章)「虚^{きよ}を致^{きわ}すこと極まり、静^{あつ}を守ること篤し。」

(私欲に惑わされずに心を虚しくすれば、常に安らかな静かな心になる。)